

特 集

非常時の人工呼吸とその対応

《巻頭言》
「今こそ備えよ」

本誌編集委員

公立大学法人横浜市立大学附属市民総合医療センター 集中治療部 大塚将秀

2011年3月11日……東日本を大災害が襲った。半年余りが経過したが、改めて亡くなった方々、被害を受けられた方々に、心よりご冥福とお見舞いを申し上げたい。

その時、私は東京の雑居ビルの一室に居た。地震には慣れていたつもりだったが、体験したことのない揺れに襲われ、しばし呆然となった。小学校時代に演習した訓練時を除き、自ら初めて机の下に潜り込んだ。死の恐怖を感じた。

東京でもこの有様なので、震源近くの方々は、さぞかし恐ろしい感覚を味わったに違いない。揺れがおさまったと思ったら、次は津波である。そして、電気、医療ガス、自家発電、衛生材料、医療器具が失われた。電気や酸素は無尽蔵に供給されるのが当たり前と思っている。平時では確かにそうである。しかし、一般電源はおろか非常電源や無停電電源が機能を失い、壁面の酸素流量計からの酸素供給も途絶えた。こんなことは誰もが予想しなかった事態に違いない。あるいは、頭でわかっている「そんなことが身の回りで起こるはずはない」というのが本音ではなかっただろうか。

それでも、災害の発生初期の医療現場には、大きな混乱は無かったと聞いている。被災地におられた方々の冷静な判断には頭が下がる思いである。

今号は、磨田 裕先生と松川 周先生に「非常時の人工呼吸とその対応」というテーマで原稿を頂いた。このようなテーマはしばしば取り上げられるが、今回は特別である。被災現場の生の声が含まれているからであろうか、読み手に伝わる何かがある。

日本は火山国であり、地震の多発地帯でもある。風光明媚な景色や温泉の恵みと引き換えに、自然災害の危険が常に付き纏っている。東海地震や南海地震の可能性も高いと聞く。今回の災害は免れた地域の方も、「明日はわが身」である。記憶が遠ざかる前に、大災害が起きたらどうなるのか、被害を最小限に抑えるにはどうすればいいのか、普段から何に心掛けたいのか、平穏な日常に感謝しつつ今から考えておきたいと思う。